

びふりおてか



同志社大学図書館報 No. 3. 1968.7.1

図書遍歴

徳永清行

図書館長

学窓を巣立って、はじめて教壇に立ってから、約40年になる。そのはじめは、当時の山口高等商業学校支那貿易科においてであった。高商であり、専門学校であったが、わが国におけるアジア研究、とりわけ中国研究においては相当高く評価されていたのであり、その発行した東亜経済研究は注視されていたようである。ハルムス教授を所長とした世界経済研究所でもそのように認められていたことを記憶する。従って、同校の図書館には、とくに中国関係の文献が豊富であった。若い教授として、アジア経済の研究に当るべく要請されはしたものの、当時では大学時代にアジア経済というような講義を聞く機会をもたなかったので、いざ自分が教壇に立つということになってから随分苦しんだものである。それでも同校の図書館のおかげでどうにか講義内容を充足しつつ前進することができた。暑い日にはシャツのまま、寒い日にはオーバーを着て書庫にかじりついていた。この図書館の責任者となったのもまだ若い日の思い出につながる。いまでは山口大学の図書館の中心となっている。中国関係の文献では、相当重要視されるものもあったが、その後どうなっているかわからない。リヒトフオーヘンの中国原典の前半はここに収っていた。

後年、京大に職を捧げるようになってからは時局の影響もあって、中国経済に関する文献を豊富に備えることができた。京大の図書館に蔵されているはずである。ここにはリヒトフオーヘン中国の後半を入手して収めておいたので両者を併せて揃ったわけである。いまでは過ぎし日の一挿話になってしまった。

そういう経過であったから、わたくしは中国に旅することが多かった。北京の琉璃廠の古書店街にはよく足を運んだものであった。来薰閣という老舗がまぶたに浮ぶが、いまではどうなっているであろうか。北京への追憶は数多く取り出せるが、ここでは当時の国立図書館に一寸触れておきたい。北海公園のあたりであったらと思うが、近代建築の立派な図書館があった。建築は当時の粋を誇るものであったが、構造様式は中国風であったのが懐しい。設備に大きく配慮されており、数多くの個室が設けられ、しかも各室ともステンド・グラスを使用して、左光線になっていた。図書館としての条件は整っていたようである。当時、蔵書40万冊といわれておったのであり、熱河文津閣の四庫全書を始め、善本類、唐の写経等の貴重な文献が

蔵せられていた。それ以上に印象に残っているのは、ここには多分に国際調がただよっていた。各国人が思い思いに読書の場を得ていた。

ただ淋しいのは、そのころ北京では、日本人を繁華街や観光地域で、よくみかけたのに、図書館というようなところでは、相会する機会に恵れがなかったことである。そうした雰囲気の中であって西欧人が中国の古典に取組んでいた姿は忘れがたい。



北京図書館

中国の図書をめぐる話に終始してしまっただけで、中国の儒者曾國藩の言葉を附記しておこう。読書人の容貌はおのずから備わるものがあるという意味を語っていた人であるが、わたくしの手許にこういうのが残っている。「読書第一要有志、第二要有識、第三要有恒」

戦後、本学の故岡本春三教授からの懇請で所蔵本の中、中国経済関係のものの中から、同教授の出身校 STANFORD 大学に寄贈した。フーバー大統領が大きく力を注いだ大学であることは周知の通りである。第2次大戦後 PEACE LIBRARY と銘打って第2次大戦にまつわる総文献を集めたいとの運動であったから、微力ながら協力した。現在に至っては手許に残っていたらと惜しまれるものもないではないが、元来、図書は私蔵するよりも、こうしたところに収まっている方が、利用度が高まるであろうと、みづからを慰めている。同大学からはフーバー家署名入蔵書本の一冊が贈られて来た。わたくしの中国研究は実りの乏しいものであるが、若干の蒐集文献が上掲の「平和図書館」にあってお役に立っていただければ幸いである。このような記録を同志社大学の図書館の一隅でしたためるのも、わたくしの学校遍歴につながるようである。

学生生活と図書館

佐枝 武

昭和43年3月
同志社大学法学部卒

大学に入学した年、私は、はじめて同志社大学図書館を見た。古ぼけた、意外に小さな建物、それが、図書館に対する私の最初の印象であった。そして、それから1年ばかりは、たまたま図書館を訪れて、自習するぐらいで、特に図書館を利用しているとは言えなかった。大学における学習と図書館との間に、どの程度の関連性があるものか、その当時の私にはまだ理解できなかったのである。私だけが、そうだったのかも知れないが。

ところが、2年生になり、専門科目が加わってくると、それらの科目を理解するためには、どうしても図書館の書物を利用しないわけには、いかないということが解ってきた。要するに、私は、図書館の本格的利用を2年の頃から始めたのである。しかし、元来、勉強がらみの私は、それでも図書館の利用を最少限におさえいていたのである。というのは、私には私なりの、実に勝手な信条というものがあったからである。すなわち、「学生は、学問をすると同時に、若者として、活動的な生活を送るべきである。その二つのバランスがとれた生活をするのが、将来の人格形成に役立つものである。」と考えていたのである。その結果は、必要最少限の図書館利用となっていたのである。また、それと同時に、学生が学問をするのは、社会に対する義務であると考え、学問への姿勢を義務の面からのみとらえていたが、むしろ、それは、権利と解すべきが妥当である。学生という、社会的身分と不可分に存在する、この学問する権利ということを考えるとき、その権利を行使する場としての図書館を抜きにしては考えられないのである。

確かに、前述のごとく、学生生活にも、勉学の面と活動的な面とのバランスが必要であると思うが、その基準は、学問する姿勢の中から、自ずと見出し得るものであり、又、学生たる者は、そう考えるべきものであろう。いまひとつ、学生の特権である学問に専念することができる権利を放棄することは、学生という、社会的身分を実質的に、自ずから放棄することでもある。この学生の権利を保持せんとする時、図書館の必要性が、重く私の上に、のしかけてくるのである。

一方、図書館は、学生の上のような権利が充分、行使できる場であることが、反射的に要求されるのである。それには、先ず第一に、図書の充実が要求される。現在、同志社大学図書館には、60数万冊の蔵書が、一応は登録されている。しかし、一般学生が図書館内で自由に閲覧できるのは、実にその三分の一の20万冊にすぎない、他は、各学部研究室に散らまっていますのである。学生が、ゼミナールのために、研究しなければならない本が、時として図書館には存在せず、研究不十分のまま、ゼミナールに出席することになる。したがって、大学当局は、すべての図書を本館へ集中することを考えていた。第二に、図書館の勉学環境の向上である。いかに建物が古くとも、防音、採光、換気等が充分であり、机、椅子等が読書に適したものであれば、設備の面ではそれでいいと思う。しかし、それを利用する学生側に、図書館がどのような所か、理解の不十分な者がいるのが現実であることは残念である。自分が読書している時、近くで騒がれては、本を読むこともできない。学生として、他人の学問する権利を理解できないはずはないと思う。学生たる自己の社会的身分と照し合わせて一層の反省を望みたい。第三に、図書館が一つの媒体となって、教える者と教を受けるものとの人格的、精神的な、きずなを更に強調させるように望みたい。先師は、次のように言われている。

「されば、同志社の歴史を以て、其校舎や敷地の歴史と混同する勿れ。学生数の増殖、資産高の膨張を以て、学校の本質的生命及び精神の消長を測る尺度と誤認する勿れ。（中略）同志社の伝統的主張によれば、教育の真価は、教ふる者と教を受ける者との人格的接触の親疏、精神的感化の濃淡に由って判断すべきものである。」と。

聞くとくによれば、本年度同志社大学事業計画の一つとして、新中央図書館が建設されることになっているとか。私は、これを期に、以上の物心両面の改善がなされんことを望み、同志社大学の今後、ますます発展を祈るものであります。

図書館と利用者

——図書館側から見た現状分析——

まえがき

図書館利用者の実態を把握することは、図書館運営の上で重要な要素である。本大学図書館においてもその利用者は、一定期間にはかなりの質的、量的な推移がみられる。ここに不完全ながら、同志社大学統計諸資料と図書館関係諸資料をもととして、利用者の動向と、それに関連した図書館を、出来るだけさぐろうと試みた。

1. 本学図書館の利用対象

わが国の大学図書館の利用者は、学生がそのほとんどを占めるが、本学もその例外ではなく、学生 98.3% に対して教職員 1.7% である。もちろん、これは大学の総人数に占める学生の比率の高さに関係するが、教職員の利用率の低さのかけには、現在の図書館の蔵書が研究者の要求に充分答えるものではないことと、研究に必要な専門書、専門雑誌等は各研究室でそな

えているという2点が大きく作用していると考えられる。このことについては、機会をみて述べるとして、当面、我々は図書館の主たる利用者である学生を対象に、その動向をさぐってみよう。

2. マス・プロ教育下における図書館

本学のマス・プロ化の現象は、際立った屈折点を示さず徐々に進行して来て、昭和41年から昭和42年にかけて急激に上昇し、総学生数が2万人に達した。それに応じて、開館日数の増加、新町読書室の開設を考慮しても、利用人員は学生数の増加に比例して増加してきた。しかし利用する学生の比率は、マス・プロ化の進行に対しても目に見えるほどの変化を示さなかった。他方、図書費は金額では年々増加しているにもかかわらず、学生一人当りの増加冊数、ひいては学生一人当りの蔵書冊数が下降している。図書費の増加分は、図書の価格の上昇分を補うだけで、実質的には、受入冊数の横ばいによって明らかなように低下している。しかし本学学生の図書館を利用しようとする意欲は、施設の不備、奉仕体制の不充分さにもかかわらず依然として強く、これは、他私学と比較して図書貸出率が高いということから最も顕著に把握できる。この実態は、今後図書館が手がけなければならない多くの問題を示唆している。いうまでもなく学問の府である大学にとって、図書館は不可欠の存在で、その充実必須の要件である。特に最近のマス・プロ化の傾向が顕著な大学の現状にあっては、その欠点を是正するための一手段としても、図書館の利用が重要視され、その意味からも一段と充実することが望まれる。

3. 利用者（学生）の図書館に対する理解と問題点

前述の通り、本学図書館利用者の98%強は学生である。この利用度の高い理由の一つとして館外貸出制度をあげることが出来る。このため学生の登録率は、昭和43年度において、全学で85.3%、新入生では90%の高率を示している。また、閲覧室別利用者数は自由閲覧室（教養図書中心の接架式）が46.5%を占めていること、月別にみた利用者数および利用図書数が、試験期をピークに休暇時に最底となる、規則的な波状変化を示すといった実態は、本学学生の図書館に対する理解度と、その利用実態を示唆してくれるものではないだろうか。もちろん、以下に行う推察は、読書調査といった利用者の実態調査（本学では、この種の調査を昭和35年11月14日に実施している。）を数回ふまえないと確実性に乏しいのではあるが、しかしそのことを一応ふまえても、館外貸出券の登録率の高さや、統計にあらわれた館内利用数と館外利用数とに我々の分析判断を加えてみると、館外利用者が圧倒的に多いことが考えられ、それに、昼間時の満席に近い閲覧席の利用状況を関連づけると、図書館を自習場として利用する者がかなり多いと考えられる。接架式をとる自由閲覧室の高い利用度から、図書館に対する認識が、中学、高校の図書室の延長線上に固定化されてしまう恐れはないか。規則的に繰返す波状変化から図書館利用の一典型が感じられる。これらに対して、図書館は入学時のオリエンテーションにおける利用指導を一学年暦の間に適当な期間を置いて、定期的実施すると同時に、さらには、カリキュラムとの関連を深めた利用指導を図書館自体で行う必要がある。そのための、館員の質的、量的な改善の具体的対策が考究されねばならない。

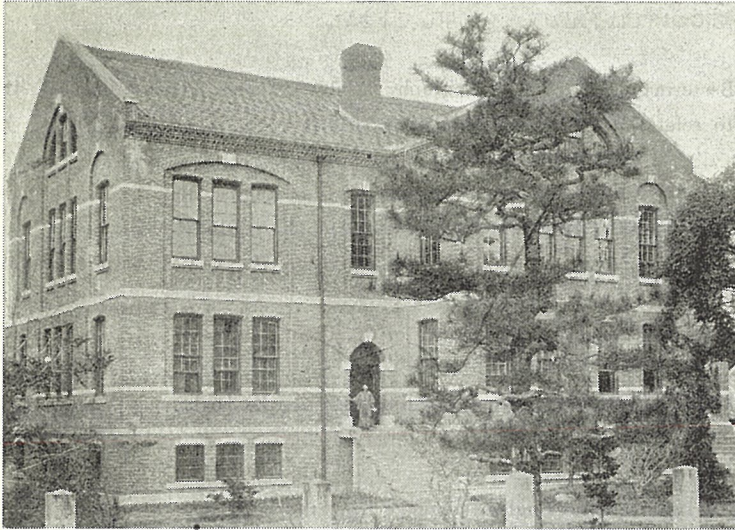
4. 利用者（学生）の学部別傾向

蔵書回転率（貸出冊数を蔵書数で割ったもの）は、貸出制度をとっていない東京の私大に比べて、関西学院大学と並んで群を抜いて高く、本学自体でも昭和38年度の約19%から昭和42年度の28%へと増大している。この飛躍は、昭和42年度統計で見ると、工学部と文学部の利用増加によるものと考えられ、昭和32年度に比べて工学部では7倍、文学部では2.2倍の増加を示し、両者で本学の全利用図書の54.4%とその半数を占めている。本学においては両学部とも、学科増設による学生数の増加もあるが、同じように学生数の増加のあった商、経済学部が、図書館利用者数において横ばいの状態にあるのと比較すれば、顕著な特徴といわねばならない。哲学、歴史、社会科学といった部門別利用冊数も大体これを裏書きするような配分をみせている。この学部別の利用者の特徴は、それぞれの学部で行なわれている教育内容と性質に関連した結果であろう。このことは図書館においても、収書、蔵書構成やレファレンスの面で参考としなければならないが、この結果を生んだ素因をさらに綿密に検討する努力がないと現状認識を誤るおそれがある。

あ と が き

図書館とその利用者に関するこの検討は、既存の統計資料を骨子とし、日常の仕事を通して生じた一つの判断を、主として奉仕の窓口業務にたずさわっている館員から述べてもらって、まとめたものである。しかし既述のように図書館の運営はそういった日常の経験も大切ではあるが、何らかの実態調査を必要とすることも明らかである。この点、実態調査を定期的に行ない図書館と利用者との間にさらに、有機的な関係を保つよう心がけられねばならない。

書籍館開館のころ



Library

前回には1876年（明治9年）、当館の起源ともいえる書籍縦覧室に焦点をあてて、そのころのようすを述べたが、今回は1887年（明治20年）^{しよじやくかん}、書籍館の竣工のころの状況を述べよう。

1875年（明治8年）の同志社英学校にはじまった、同志社は1877年（明治10年）神学校の濫觴である英学校余科^{にょこうば}、ならびに女学校の前身、同志社分校女紅場をはじめとして、つぎつぎに各学校が設立された。名称や組織などは、ときとして変更されたこともあったが、1892年（明治25年）、同志社政法学校が開校されて、これで同志社は予備校、普通学校、波理須理科学学校、神学校、政法学校、女学校および京都看病婦学校と、さらに同志社病院をもつ一大学園に発展した。その間、

新島先生は当初からの素志である“大学”の設立への情熱をもやされ、早くも1882年（明治15年）「同志社大学設立之主意之骨案」を起草されたのであるが、生徒数も1876年（明治9年）の76名が翌年には122名、1887年（明治20年）には688名と増加、さらに一時は800名を越えたこともあった。一方、施設・設備の面でも教室・講堂・公会堂・体操場・生徒寮・食堂などが、相ついで建てられ、その一つとして、ここに述べる書籍館も1885年（明治18年）12月18日、定礎式を挙げ、1887年（明治20年）竣工、11月15日にはその開館式が盛大に行なわれた。この建物は現在、有終館と改称されているもので、地階、屋根裏部屋を含めて4階建、煉瓦造の当時としては堂堂たるものであったことは容易に想像されるであろう。ただし、そののち改造、特に1928（昭和3年）11月の火災によって、相当に改変されたもようである。

しかしながら、その名称は書籍館であっても、竣工当初からこのなかには理学・化学・数学の教室もあり、法政学校もまた開設当初からこの建物を使ったもので、2階西側の一番大きな部屋を書籍室＝図書室にあてたのみで、ささやかなものではあった。そして、この書籍館の名称はそののち、ほどなく図書館と改称されたが、図書室の名称はそのあと、しばらくはのこっていたようである。

そして、蔵書数も、すでに1887年（明治20年）までに3,000を数えていたようで、翌年3月には総計3,412となり、このうち洋書が圧倒的に多く、2,087であったことは注目に値するといえよう。そののちも逐年増加して、特に1889年（明治22年）10月に小室信介・沢辺正修両氏を記念して寄贈開設された小室・沢辺文庫（本誌No.1で紹介）によって、一挙に10,000を越え、続いて1893年（明治26年）4月には植木枝盛の旧蔵書が寄贈され、植木文庫（本誌No.2で紹介）が設置され、さらに新島先生を記念して、1892年（明治25年）9月に、教職員・生徒・校友の浄財を集めて収集することとした新島記念文庫もこの年から実現をみ、一方諸学校の蔵書も増えて、同年度末すなわち、1894年（明治27年）3月末の同志社総蔵書数は16,543となり、このうち14,653が図書館の所蔵となっている。

つぎに、図書室の利用の面であるが、全面開架式で、教職員・生徒ともによく利用していたようで、平日は午前8時から12時までと、午後1時から4時まで、土曜日は午前8時から11時30分まで開室されて、一定の制限のもとに生徒にも貸し出しがされていた。そして、返納期に遅れたものに対しては一定期間の貸し出し停止を、汚損したものには弁償を定めていた。なお、図書館の運営については、最終的には校長の総括職務の一つとされていたのは勿論であるが、全教員会・教頭会および各校教員会とは別に常任の図書館委員を置いて図書館業務の執行が委ねられていたが、実際の業務、たとえば図書室の見繕係（図書係員）は多く、今でいう学生アルバイトが当たっていたと思われる。また、図書整理なども近代化されたものではなく、普通書と専門書といった大ざっぱなわけかたで、前者には茶色縁、後者には緑色縁の記号紙すなわちラベルが貼られて、受入番号が記入されていたようである。

英語・英米文学に関する二次文献

今回は英語・英米文学をとりあげてみました。英語・英米文学を研究する場合、その手引きとしての文献案内や書誌等の二次文献を紹介します。英語・英米文学関係の二次文献といっても非常に沢山あるので、ここではできるだけ包括的で、主要なものだけにとどめることにしました。個々の書誌については下記の文献を利用して下さい。

I. 英語・英米文学関係の文献案内

英語・英米文学関係の二次文献についても、Besterman の *A world bibliography of bibliographies*. 3d ed. & final ed. 4v. 1955-56 (新025;B) や、Winchell の *Guide to reference books*. 8th ed. 1967 (新015.2;W) に詳しくでていますが、英語・英米文学関係の専門の文献案内としては次のようなものがあります。

1. Altick, Richard Daniel & Wright, Andrew : *Selective bibliography for the study of English and American literature*. 2d ed. New York, macmillan, 1963. 149p. (図書館所蔵:初版(1960刊) 138p. 旧016.84;A-2)
2. Bond, Donald Frederick : *A reference guide to English studies*. Univ. of Chicago Press, 1962.171p. (Phoenix books, p83) (旧016.01;B2)
3. Gohdes, Clarence : *Bibliographical guide to the study of the literature of the U.S.A.* Durham, N.C., Duke Univ. Press, [c1959] 102p. (旧016.83;G)
4. Jones, Howard Mumford & Ludwig, Richard M. : *Guide to American literature and its background since 1890*. 3d ed. rev. & enl. Cambridge, Harvard Univ. Press, 1964.240p. (英文科所蔵. 図書館所蔵のものは初版(1953年刊) 151p. 旧830.9;J)
5. Kennedy, Arthur, G. : *A bibliography of writing on the English language from the beginning of printing to the end of 1922*. New York, Hafner, 1961. 517p. (英文科所蔵)
6. Kennedy, Arthu G. & Sands, Donald B. : *A concise bibliography for students of English*. 4th ed. Stanford Univ. Press, 1960. 467p. (女子大所蔵. 図書館所蔵のものは1950年刊行のもの, 161p. 旧016.894;K)
7. Sanders, Chauncey : *An introduction to research in English literature history ; with a chapter on research in folk-lore* by Stith Thompson. New York, Macmillan, 1960. 423p. (英文科, 女子大所蔵)
8. Spargo, John W. : *A bibliographical manual for student of the language and literature of England and the U.S.A. : a short-title list*. 3d ed. New York. Hendricks House, 1956.285p. (旧016.894;S)
9. 御興員三編: *イギリス文学一案内と文献*— 研究社 昭43. 4. 250p. (目下入荷中)
イギリス文学を研究する初学者の手引きとして編まれたもの。

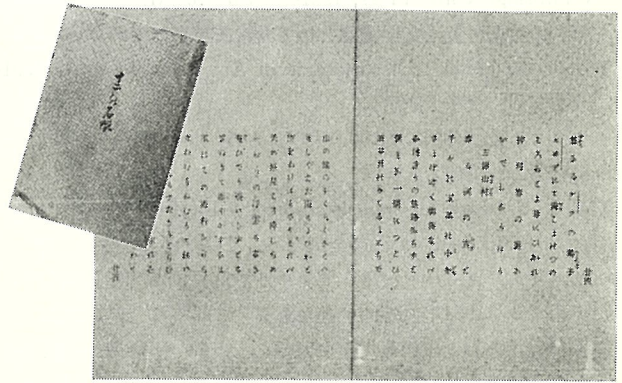
II. 英語・英米文学関係の書誌

1. *Abstracts of English studies*: an official publication of the National Council of Teachers of English. V.1- Boulder, Colo., 1958- Monthly (except July & Aug.) (女子大所蔵)
英語・英米文学に関するアメリカならびに外国の雑誌に掲載の論文の抄録。
2. *American bibliography for 1921-* Publications of the Modern Language Association of America. V.37(1922)- (英文科, 女子大所蔵)これは現代ヨーロッパ文学・語学に関する年刊書誌で、1957年まではアメリカ人の労作に限定。アメリカ文学に関する項目がある。この *American bibliography* は 1956-62年 *Annual bibliography* に、1963年以後は *MLA international bibliography* に改題。1921-1954/55年は *MLA American bibliography of books and articles on the modern languages and literatures* として N.Y. の Kraus が1964年に reprint. 1956年以後は *MLA international bibliography of books and articles on the modern languages and literatures* として同じく1964年に Kraus が reprint (どちらも英文科所蔵)
3. *American literature*. 1929- Published quarterly by the Duke University Press, with the Co-operation of the American Litration Group of the Modern Language Association of America. (英文科所蔵)
4. Blanck, Jacob Nathaniel : *Bibliography of American literature*. Comp. by Jacob Blanck for the Bibliographical Society of America. V.1- New Haven, Yale Univ. Press. 1955- (旧016.83;B)
現在刊行中で8乃至9巻を計画。1931年より以前になくなった約300人のアメリカ作家の書誌。
5. *Cambridge bibliography of English literature*. Ed. by F.W. Bateson. 5v. Cambridge Univ. Press, 1940-57 (旧016.84; B) 各専門家が分担した最も精密な書誌で、研究者に欠くべからざるもの。V.1-3, 600-900; V.4, index ; V.5, supplement.

6. Leary, Lewis Gaston: *Articles on American literature, 1900-1950*. Durham, N.C., Duke Univ. Press, 1954. 437p.
(旧016.83;L2) 1950年以降は PMLA の Annual bibliography と Duke Univ. Press 刊行の American literature (季刊) 1929— を参照。
 7. Modern Humanities Research Association : *Annual bibliography of English language and literature*. V.1 (1920)-
Cambridge Univ. Press, 1921— (旧016.84;M, ただし全部そろっていない)
年刊の英語・英米文学書誌として非常に精密なもの。
 8. Woodress, James : *Dissertations in American literature 1891-1955* Durham, N.C., Duke Univ. Press, 1957. 100p
(英文科, 女子大所蔵)
アメリカ及び外国の約100の大学からの doctoral dissertations の分類目録。最近のものは, 3 の American literature に掲載されている。
 9. *The year's work in English studies*, V.1 (1919/20)- Pub. for the English Association. London, Murray, 1921—
(旧840.4;E3-4, ただし全部そろっていない)
イギリス, ヨーロッパ及びアメリカで出版された英文学に関する年度内の研究中, 主要なものを紹介, 短評したもの。
英語学及び1954年以後はアメリカ文学に関するものも収録。
 10. Daiches, David : 現代英文学の展望 上田勤 平野敬一共訳 研究社 昭35 273, 244, 7p. (旧840.9;D18)
Introduction to English literature. 5v. の V.5 : *The present age after 1920* を翻訳したもので, 後半の244p. は 1914
年から1950年半ばに至る時期の作家別書誌。訳者が最近のものを若干増補し, 邦訳書も添えている。
 11. 市河三喜: 英語学 研究と文献 改訂版 三省堂 昭31 324p. (旧016.894;1-1a)
英語学の各分野の研究について概説しており, 文献に簡単な解説をつけている。
 12. 斉藤勇: イギリス文学史 第4増訂版 研究社 昭32 850p. (新930.2;S)
巻末のpp597-784に注解つきの参考書誌がついている。
- Ⅲ. 日本における英語・英米文学に関する書誌
1. 文学・哲学・史学文献目録 (日本学術会議編) 1-10 (昭27-35) (新028;N) 11以後は下記の書名に改題。
文科系文献目録, 11 (昭36) — (新028;N-2)
このうち, 2, 12, 18 [巻] が西洋文学・語学になっており, その XI が英米文学・語学になっている (ただし, 18 [巻] は II が英米文学・語学になっている。
収録文献は主要なものに限定され, 選択されている。収録期間は昭和20年8月15日以後のもので, 件名と筆者名索引がついている。
2 : 昭20.8.15-昭27. 6.30 (昭29.3刊)
12 : 昭27.7. 1-昭34.12.31 (昭36.3刊)
18 : 昭35.1. 1-昭39.12.31 (昭41.3刊)
 2. 英米文学研究年報 学苑 (昭和女子大学光葉会) に毎年1回掲載, (旧808;S5)
昭和32年4月 (昭31.4-32.3収録) 以後毎年4月号に1年分を掲載, 項目は単行本文学, 単行本語学, 雑誌文学, 雑誌語学の4つに分けている。雑誌記事索引 (国立国会図書館編) より専門の収録誌が広い。
たとえば英語青年や英語研究は雑誌記事索引には収録されていないが, 学苑の英米文学研究年報には収録されている。
 3. 雑誌記事索引-人文・社会編- (国立国会図書館編) 1948-1月刊 (新P027;Z)
英語・英米文学については, 最近, 項目10, 文学・語学の下に「外国文学」と「外国誌」の見出しの下に一括し, 著者名のABC順に配列している。
 4. 英語年鑑 (英語青年編集部編) 研究社 昭和35, 37, 39年以後年刊 (英文科, 女子大所蔵「図書館:目下入荷中」)
これは日本の英語・英米文学研究についての便覧, 英語英文学界の活動, 講演・研究発表 (口頭) 一覧: 英語英文学関係書籍一覧: 英語学・英米文学研究業績一覧, 全国大学英語英米文学科便覧, 英語関係研究団体・研究誌一覧, 英語英文学関係人名録からなる。
 5. 英語青年 研究社 月刊 (新P830.1; E2)
巻末の「新聞雑誌英学一覧」の見出しの下に, 英語・英米文学に関する文献を掲載。又年度毎に「英語学英米文学研究業績一覧」を掲載していたが, 昭和35年より「英語年鑑」に掲載。
 6. 福田なおみ編 明治・大正・昭和邦訳アメリカ文学書目 細入藤太郎監修 原書房 昭43 240P 明治百年記念出版
(最近入荷) 明治初年から昭和42年末までの100年間のアメリカ文学の邦訳。小説, 戯曲, 詩, 評論, 日記及び〔古曲的な〕児童図書, 大衆向きの探偵小説を漏れなく収録, 英文原書名, 訳者, 訳書名の索引付。
 7. 国立国会図書館編 明治・大正・昭和翻訳文学目録 風間書房 昭34 779p. (旧016.8;K3-2)
昭和元年から昭和30年までに邦訳刊行された欧米文学作品 (小説, 戯曲, 詩, 評論, 随筆, 紀行, 日記, 書簡) の目録。

「十二の石塚」 — ピック・アップ —

明治18年6月26日に行われた同志社英学校の卒業式は、日本の近代文学史の上にも大きな意味を持つものでした。この日の卒業生はたゞ一人、新島先生の郷里安中から先生をしたらって同志社に学び、本科5年、余科（神学科）3年のコースを終った湯浅半月（吉郎）でした。そしてこの席上、半月自身によって朗読発表されたのが旧約聖書の士師記に取材した新体詩「十二の石塚」です。3年前東大の外山正一らによって「新体詩抄」が発表されていますが、これに対して関西での新体詩の初声であり、文学的にははるかに高いものと評価されました。半月は一旦帰郷し、すぐにアメリカへ留学しましたが、その直後の10月、新島先生の絶大な支持者でもあった兄湯浅治郎の手で「十二の石塚」は出版されました。58ページ、上下20cm足らずの小冊子で定価6銭でしたが、現在ではこのさゝやかな初版本が古書界の稀購書の最たるものとなっています。この本を所蔵していないと云うことは、同志社の図書館として非常に不面目なことでしたが、この春ようやく入手することが出来、貴重室の書架に収まりました。



半月は帰朝後母校の教壇に立ちヘブライ語の講義等を担当しましたが、他方図書館学の権成としても名高く、デューイの十進分類法を紹介し、前号で紹介された小西増太郎氏と協力して同志社図書館の基礎をかため、又京都図書館（府立）館長としても多くの業績を残しました。第10代及び12代の同志社総長であった湯浅八郎は半月の甥（前記治郎の子）に当たります。

半月は又もう一つ大きな記念を同志社に残しています。それは、彼が新島家の家紋である根堀の笹を単純化して作った同志社の徽章です。白秋の作詞になる学歌によって三つ葉のクローバと思い込まれているようですが、最近このデザインに関する資料が発見され、その由来がはっきりしました。その資料は同志社社史史料編集所に所蔵されています。

あ と が き

“びぶりおてか” 第3号をここにお届けいたします。

「同志社大学図書館の歴史」と「特殊文庫」は交互に掲載の予定であり、本号では、「同志社大学図書館の歴史（その2）」を掲載いたしました。

本号では、図書館と利用者という主題テーマを設定し、本年三月本学法学部を卒業した佐枝武氏に、図書館の利用者としての立場から、図書館をどのように利用し、そして、図書館は、どのようにあるべきか等について、卒直な意見、希望等を書いてもらいました。

そして、その反面、図書館側からみた利用者の動向、統計上からみた利用者の分析等を試みました。

「学生生活と図書館」という題で書いてもらった前記佐枝武氏からは、本年春本学卒業記念として、又、本学法学関係図書費宛として、金五万円也の寄附をいただきました。ご芳志、厚く感謝申し上げる次第であります。

“びぶりおてか” 同志社大学図書館報 No. 3. 1968年7月1日 発行

発行 同志社大学図書館 京都市上京区今出川通烏丸東入 電話 211 - 2311
編集責任者 前川 嘉門